British Working Class in 1950s : On Alan Sillitoe and John Braine

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松岡, 美香 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6364

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

1950 年代の英文学に見られる労働者像
― Alan Sillitoe と John Braine を中心として―

松　岡　美　香

はじめに

イギリスにはまだ階級制度が残っている。2000 年 5 月にローラ・スペンス（Laura Spence）という英国北部出身の 18 歳の女子高校生が，オックスフォード大学（Oxford University）を受験したが不合格となった。彼女が当時通っていた高校の校長は，彼女の出身地が原因で不合格になったのではないかとマスコミに訴えた。さらに当時の財務大臣ゴードン・ブラウン（Gordon Brown）がこの件に言及し，オックスフォード大学は，いまだに階級を気にするようなエリート気質を持っていると批判したことから，「ローラ・スペンス事件」として社会全体に知られるようになった。この事件は 21 世紀になった今でも，イギリス社会に階級的な名残や考えがあることを裏付けるものである。

現在のイギリスでは，上流階級の者でも地方のなまりがあったりするため，階級の判別が難しい。また彼ら自身でも自分がどの階級に属するのかが分からないことがある。イギリスでは人に所属階級を問うことはタブーとされている。彼らは，出身校，アクセント，身なり，好きなスポーツ，行きつけの店をヒントにして他人の階級を探る。かつて BBC が資産，社会，文明の観点から質問項目を作成し，自分の属する階級が分かるテストを実施したことがある。BBC のテスト結果は，従来の 3 つの階級区分―上流階級・中流階級・労働者階級―をさらに 7 つに細分化したものである。その詳細は，エリート階級（「絵に描いたようなイギリス貴族の系統で服装は質素」），中流階級（「高学歴専門職で収入は高く服装も遊びも成り金の気がある」），技術系中流階級（「専門職でお金はあるが外出したり人付き合いが嫌い」），新興労働者階級（「大学に学費を使うより高卒で働き若くして家を買う」），労働者階級（「親の代からの職人でビールとテレビのサッカー観戦が好き」），新興ホワイトカラー階級（「高学歴ホワイトカラーだが薄給で友達が多い」），日雇い労働者階級（「いつ解雇されるか分からず経済的に最も不安定な層」）となっている。[1]

本研究では，労働者階級の人々に焦点をあてる。扱う時代は，労働者階級

が如何に社会から虐げられているのかということが表面化した 20 世紀前半から中頃までである。BBC の現代版階級区分から言うと，おそらく労働者階級と日雇い労働者階級となるだろう。

1. 2 つの世界大戦と＜怒れる若者たち＞

階級（class）という言葉ができたのは 17 世紀である。当初は海軍の序列として使用されていたが，17 世紀の中頃から一般社会で人々を社会的地位に分ける際に用いられるようになった。[2] 階級という言葉の意味を定義づけた人物がカール・マルクス（Karl Marx, 1818-1883）であった。彼は経済的視点から階級を考察し, 物を生産する際, それをプロデュースする者（bourgeoisie）と，物を製造するための労働力を売りにしている者（proletariat）とに分けた。[3] しかし時代の移り変わりにより，彼が定義した階級は社会にそぐわなくなってきた。そこでマックス・ウェーバー（Max Weber, 1864-1920）は経済的な観点だけではなく，教育や技能という視点も導入することを考え，財産階級と営利階級の 2 つに大きく分けた。財産階級とは，土地，建造物，資産などをあらかじめ所有している人のことであり，また営利階級とは，仕事場などで，活かすことができる技術やサービス能力を持っている人のことである。またレイモンド・ウィリアムズ（Raymond Williams, 1921-1988）は身分のある人間とそうではない人間の間に挟まれている人（middle class）と, 製造に携わっている人（working class）とを定義した。[4] 本論では，教育的観点からも階級を考察しているマックス・ウェーバーの考えを中心に，論を進めたい。

まず，第一次世界大戦から 1950 年代までのイギリス社会について概観したい。1914 年 8 月に第一次世界大戦，1916 年にソンムの戦いが勃発し，イギリスは苦戦を強いられた。戦場では，身分や階級による仕事の制限や待遇の差がなくなり，兵士の中でも身分や階級の概念が薄れつつあった。国内では戦場に多数の男性が駆り出され，それまで男性が行っていた仕事を女性が行うようになっていった。それは身分や階級を問わず，イギリス女性の社会進出を活発にした。戦争はイギリスに階級という概念を薄弱化させたと考えられる。

1939 年には第二次世界大戦が勃発した。この戦争でも身分に関係なく，すべての男性が兵士として，戦地に赴くことが求められた。しかし，1945 年にはドイツ降伏により，終戦を迎えた。戦後，政府は前回の大戦後の不景気に戻りたくないという強い国民の望みを理解し，手厚い政策を心掛けた。例え

ば銀行や鉄道などの公共事業を国有化し，国の指導のもとで経営したり，「ゆりかごから墓場まで」保障する福祉制度の充実，家族手当の普及，住宅の増加，医療と教育の無料化などに努めたりした。国民は国内の物資減少により，映画やスポーツ観戦などの娯楽にお金を費やすようになった。また労働者には年 1 回の有給休暇も与えられるようになった。[5]

1950 年代は，テレビや電話を所有する人が多くなった。また住宅もマンションになり，自分の家を持てる人が多くなった。ベビーブームが起こったのはこの時期である。[6] イギリス経済は依然として低い成長ではあったが，国民の生活は国の補助などにより，戦前よりも向上したと考えられる。

そんな中，1953 年から 1958 年頃まで，＜怒れる若者たち＞（'Angry Young Men'）と呼ばれる作家たちが登場した。彼らは労働者階級や中産階級のいずれかの出自を持った作家たちで，いろいろな意味で社会に対して批判的であった。この呼称で呼ばれていた作家は，およそ 8 人である。彼らは全員が労働者階級というわけではない。中流階級出身の者もいれば，労働者階級出身の者もいる。このメンバーの中から本論では，早くに学校教育を終えた 2 人の作家，アラン・シリトー（Alan Sillitoe, 1928-2010）とジョン・ブレイン（John Braine, 1922-1986）を取り上げる。

シリトーの『土曜の夜と日曜の朝』（*Saturday Night and Sunday Morning*, 1958）とブレインの『年上の女』（*Room at the Top*, 1957）には，20 世紀中頃のイギリスにおける労働者階級の生活が，よく反映されていると思われる。本論では，その比較を中心に，2 人の労働者階級についての考え方の類似点と相違点を明らかにすると共に，当時の労働者階級の人々の特徴について考察したい。

2. アラン・シリトーが描いた労働者階級

アラン･シリトーは貧しい労働者階級に生まれ育った。彼は 1928 年 3 月 4 日，ノッティンガム（Nottingham）の郊外にある公営の住宅で，5 人兄弟の次男として生まれた。『土曜の夜と日曜の朝』の主人公アーサー･シートン（Arthur Seaton）は，シリトーが出会った労働者階級の人々の生き様，性格，価値観を土台とし，脚色を加えた人物として書かれている。50 年代のイギリスにはシートンのようなタイプの若い労働者が多かったが，とりわけアーサー・シートンにはモデルとなった人物がいた。そのことについては，シリトー本人が

次のように述べている。

> I gave this character the name of Arthur Seaton, modelling him physically on some one I'd boozed around with in my factory days.[7]

しかし，このアーサーのモデルとなった人物については，明らかにされていない。では，アーサー・シートンとはどういった人物なのか。

アーサー・シートンは1925年頃に，ノッティンガムで生まれた。シリトー同様，5人兄弟の次男で，現在22歳の青年である。15歳から自転車工場の作業員として父親と共に，月曜日から金曜日まで働いており，18歳から2年間軍隊に入隊し，除隊後，再びこの自転車工場に戻り，現在まで働き続けている。

アーサーは現在の生活状況について，不満を感じていないように思われる。彼は祖父が生活を営んでいた戦前と，戦後である現在の生活状態を比べて，現在の方が良いと言う。戦争前の家の生活は，失業手当だけでまかなわれており，余裕がなかった。しかし戦争後，生活は一変し，仕事にもありつき，娯楽を楽しむだけの経済的余裕を持つことができた。戦争は労働者階級の生活を大きく変えただけではなく，労働環境も大きく変えた。現実のイギリスでも戦争は社会に大きな変化をもたらし，人々の階級意識を薄弱化させ，労働者階級の生活改善へと向かうきっかけとなったと考えられる。ヴィヴィアン・ホールは第二次世界大戦について，「この戦争について一つのことが，たった一つのことが存在する。戦争は，諸階級を即時に完全に平等化するものである」と述べている。[8] アーサーが戦前より戦後の暮らしの方が良いと感じる理由は，戦争を契機にイギリス社会に強く根付いていた階級意識が薄れ，労働者階級の生活が改善されたためであると考えられる。

彼はイギリス政府が定めた制度と権威を好まない。シリトー自身も，社会制度や権威に対して怒りを抱いていた。彼は対談記録の中で，1984年のイギリスには300万人の失業者がいるにもかかわらず，その状況を書いている作家がいないことを嘆いている。彼はその理由として，政府が余計なものに金銭を費やし，必要なものに投資していないことをあげている。

制度や権力を嫌っているアーサーだが，勤務態度は無断欠勤もなく，非常に真面目である。また彼は非常に家族を大切に思っている。アーサーの家族思いは，実際の労働者階級の人々の特徴を反映している。労働者階級の人々

は，集団や人との繋がりを非常に大事にしていた。また彼らは非常に狭い範囲の中でコミュニティーを形成しており，外部との接触を図らなかったため，地域の人々や友人とだけ親密な関係を構築したり，家族という集団を大切にしてきたりしたのである。アーサーが家族を大切にするのは，こうした労働者階級の人々の精神が彼の中に深く根付いていることを示している。

また労働者階級の特徴として，彼らが他人を評価する際，階級ではなくその人の内面を重視するということが挙げられる。アーサーは役職や社会的身分階級を意識せず，内面を見極めて他人を評価している。彼は人間には上下がないと信じている。また一方でアーサーは，他人に自分を評価されることを嫌っている。彼は他人による評価は安直であり，本当の自分に対する評価ではないと思っている。だからこそ彼は他人を評価する際，他人の内面を重視するのである。シリトーもアーサー同様，異なる立場の人との接触はほとんどなく，非常に狭いコミュニティーの中で育った。それ故，彼は階級に否定的であり，他人に対する評価においては階級ではなく内面を重視するようになったのである。こうした他者への評価方法はこの 2 人に限られたことではない。それは，狭いコミュニティーの中で育った労働者階級の人々の特徴であったと考えられる。

労働者階級の人々の生活は，戦争を契機に大きく変化した。しかし変化しなかったものもあった。それは自分と周りの人々は平等であるという考えであり，また労働者のコミュニティーの中で育まれた共同体意識であった。この共同体意識は戦後の社会変化によって消滅したと考えられている。しかし，アーサーを見る限り，こうした共同体意識は失われていない。これは戦後も，労働者のあいだで長年培われてきた共同体意識が残っていたという証拠ではないだろうか。

3. ジョン・ブレインが描いた労働者階級

ジョン・ブレインの『年上の女』もシリトーの小説同様，労働者階級の人々について書かれた作品である。ブレインは 1922 年 4 月 13 日，ヨークシャー（Yorkshire）地域のブラッドフォード（Bradford）で生まれた。両親は下層中産階級であった。生活は貧しかったが，家族愛に恵まれており，家族の絆は強固であった。

『年上の女』はブレインが体験したことをもとに執筆されたものであり，そ

こに書かれている恋愛はもちろん，労働者階級の人々の生き様や価値観なども，彼の現実世界での体験を反映していると考えることができる。ブレイン自身，彼の作品について以下のように述べている。

> “None of my novels is autobiographical, but all of my life is in them.” John Braine once said. “Whenever I’m writing a novel, I see places in my mind’s eye. I must be absolutely concrete.”[9]

この作品に限らず，彼が執筆した作品は彼の実体験を土台に書かれているケースがほとんどである。作品の中には彼の人生観や考え方が投影されているのである。では，ブレインは『年上の女』で，いったいどのような労働者たちを描いたのだろうか。

主人公ジョー・ランプトン（Joe Lampton）は，1921 年，ダフトン（Dufton）生まれの 25 歳で労働者階級に属している。彼は中学卒業後，ダフトン市役所の会計課に勤め，19 歳で軍隊に入り，除隊後，ウォーリ（Warley）の街にやってきて，現在ウォーリ市役所で上級会計検査官として働いている。彼は 20 歳で両親を失い，それからは叔母の家に月 8 ポンドを払って下宿生活をしている。彼の経済状況はアーサーと比較すると，かなり恵まれている。

ジョーとアーサーが決定的に違うところは 2 つある。1 つ目は，ジョーには現在の労働者階級から抜け出し，更に上の階級を目指したいという野望があることである。2 つ目は，結婚を階級上昇の 1 つの手段として考えており，結婚に対して肯定的であるということである。

一方で彼らが似ている点もある。それはジョーも権威や他者による支配を嫌っていることである。彼はケンブリッジ（Cambridge）を妬ましく思っており，大学教育を受けた人間が国を動かしていることに嫌悪感を抱いている。彼は権威や他者による支配を望んでいない。この点がジョーとアーサーが似ている点である。

またジョーの中にも，労働者階級の特徴である共同体意識が見受けられる。彼はウォーリで，劇団に所属できたことに満足感を得ており，それは彼に共同体への帰属意識を与えている。ジョーに見られる共同体への帰属意識はアーサーも持っていたものであり，労働者階級の特徴の 1 つである。それらはジョーのように現在の社会的地位から脱しても，捨てることができないものであっ

たと考えられる。

ジョーはアーサーと比べると，自分の社会的地位に満足しておらず，上昇志向を持っている。結婚は彼にとって，自分の社会的地位を高める重要な手段であった。彼はアーサーのように，結婚に対して消極的な考えは持っていない。またジョーが労働党を好意的に見ている点も，アーサーとは異なる。しかしジョーも権力や支配に対して嫌悪感を抱いている点，労働者階級時代に共同体の中での暮らしに培われた共同体意識を捨てきれずにいる点は，生粋の労働者階級であるアーサーと似ていると考えられる。

結び

イギリスの階級意識が薄れたきっかけは，戦争であった。終戦を迎えて，労働者の味方であると謳う労働党が政権を握り，労働者階級の人々の生活改善に向けた政策を実施した。しかし労働者階級の人々の中には，自分たちを救う政策を打ち出している労働党が，自分たちの給料の中から容赦なく，税金を徴収することに対して，矛盾，不安，疑問を持つ者もいた。労働者階級の人々は，アーサーのように自分が生まれ育った階級で満足している者や，ジョーのように上の階級を目指そうとする者がいた。これは小説の中だけではなく，実際のイギリス社会にも見られる現象だった。

社会がこのように大きく変化する一方で，伝統的な労働者階級の特徴も失われずに存続していた。その 1 つが共同体意識である。彼らは昔から，狭いコミュニティーの中で生活しており，自分と異なる階級の者と接触する機会がほとんどなかった。彼らには階級意識が薄く，自分と他人は平等であるという考えがあり，そこから強い共同体意識が生まれた。アーサーやジョーの中にも，こうした共同体意識が強く表れている。ここで取り上げた 2 つの小説は戦後のイギリスを舞台としているが，そこには共同体意識を感じさせるような発言や行動が表れている。労働者階級の共同体意識は，戦後による社会の大きな変化の中でも，消滅せずに残っていたと考えることができるのである。

注

1. コリン・ジョイス,「それでも英国から階級は消えない」,『ニューズウィーク日本版』（東京：阪急コミュニケーションズ，2013），p.45.

2. Gary Day, *Class*. (London: Routledge, 2001.), pp.5-6.
3. 同上，p.7.
4. 同上，p.8.
5. G. R. Grant, et al 著, 田口孝夫, 田中英史, 丸川桂子 訳,『イギリスの歴史:ビジュアル版』（東京：東洋書林，2012），p.361.
6. 同上，p.371.
7. Alan Sillitoe, *Mountains and Caverns: Selected Essays*. (London: W.H. Allen, 1975), p.36.
8. デヴィッド･キャナダイン著，平田雅博，吉田正広 訳,『イギリスの階級社会』（東京：日本経済評論社，2008）からの孫引き，p.231.
9. Judy Simons, "*John Braine*", *Dictionary of Literary Biography: Yearbook*.（London: Gale Research, 1987）からの孫引き，p.214.

使用テクスト

Braine, John, *Room at the Top*, (London: Random House, 2002)
Sillitoe, Alan, *Saturday Night and Sunday Morning*, (London: Harper Perennial, 2008)

（平成 27 年度大学院人間文化研究科
言語文化学専攻英語文学・英語教育専修修士課程修了）